

資料【クアンドイニャンザン[人民軍]紙1993年7月24日掲載】

## ドンロク三叉路の10人の娘の25年

ザー・ズイ・トン

25年は、生まれたばかりの子どもが父親になり、年若い青年が老いていく時間である。歴史は何度も繰り返すようで、ひとつの戦争が終わり、銃声が次第に静まり、爆撃の煙が消散する時はまた、その戦争の政治面についての議論が湧き起こる時でもあるが、その多くは部外者によるものである。声を上げるのにもっともふさわしい人々は、永遠に戦場にとどまっている。彼らと同じ部隊の者で、幸運にも帰ってきた者は、自分が過ぎ去った一時代の人間であり、自分の考え方や依って立つところから従って戦争を描き出そうとしても、そのための小説の書き方も知らないという劣等感につきまといられるのである……。

そういった考えを分けあってくれるのなら、私と一緒にドンロク三叉路まで立ち返ってほしい。そこは青年突撃隊の10人の娘が、ひとつの爆弾の音のあと、一瞬にして、遺体は全く損なわれずに、同時に戦死したところである。

その時代を生きた者なら誰でもきっと覚えているだろうが、1968年は、戦局の中でもっとも激烈な年であった。テト攻勢のあと、アメリカはベトナムの泥沼から徐々に足を引き抜いていくことを受け入れざるをえなかったが、我々の側も非常に多くの損失を支払わなければならなかった。勢力を強化し、地盤を守るために、戦場に人員、武器、食糧、ガソリンを増援することが、この上なく緊急に必要となった。アメリカは無制限の爆弾投下から、制限つき爆弾投下の戦術に変えたが、それはすなわち、空軍と海軍の全力量を集中して、旧第4区に属する4省<sup>1</sup>を破壊し、前線への支援の道を切断することであった。おそらくその時期、米軍参謀の各機関の机の上に、ハティン省カンロク県の地方の何千枚もの写真が撒かれていたにちがいない。中でもドンロク三叉路についての詳細な写真が目立ったことであろう。ゲアン省西部の森林山岳地域を越えると、ホーチミンルートはラム川、ラー川を渡り、ハティン省に入るが、そこで50キロほど、平野の間を隠すものもなく身をさらさなければならぬ。パイヴォット三叉路に来ると、道路は二本に分かれる。一本は1号線道路で、海岸に沿ってガン峠を越え、完全に敵機の監視範囲にあり、ほとんどの大きな橋は破壊され、雨季には浸水し、泥濘の地となった。もう一本は15号線道路で、ドンロク三叉路を超えてフオンケに上り、重なり合ったチュオンソン山脈に隠れて、クアンビン省の西部に入る。ドンロク社にはいくつかの小さな村落があり、裸の丘の麓に静かに隠れていたが、荒れ果てた田畑は、我々と敵の戦略的な力を置く地点になっていた。ドンロク三叉路は、一本はカムソンを過ぎて1号線道路に再び合流し、一本はチュオンケン峡谷を通過してフオンケに登る、裸の丘の麓に沿った3キロの道であり、道の縁は泥田であり、北側も雨季にはいつも浸水する道になっていた。このごく細い糸が切れると、いくつもの兵団も、米、銃弾、ガソリンを積んだ何千台ものトラックも立ち往生してしまい、米機が追跡する餌食になってしまうであろう。

以上に書いた文字の羅列は、軍事報告のように無味乾燥である。しかし当時は、我々16000人

1 [訳注] 17度線の北のタインホア、ゲアン、ハティン、クアンビンの4省

の人間はすべて、それを本当に細かく理解しなければならなかった。なぜなら、ドンロクに来ることは、死を選ぶ準備ができていたということであったからである。我々は自分が何のために死ぬのか理解しなければ、すすんで死ぬことはできない。半年間ずっとドンロクは爆弾と銃弾で震動していた。ミサイルを除いても、42000以上の爆弾が三叉路に降り注ぎ、平均して3平方メートルの土地に1個の爆弾が落ちた。昼も夜も、三叉路は燃え尽くす火にさらされ、夜には照明弾に照らされた。照明弾は目がくらむほど明るく、ラ・ティ・タムが坐って爆弾を数えている高い丘から数キロ離れているのに、4枚のアルミの羽根を地面に広げたマグネット爆弾をはっきり見ることができた。爆弾の埃と煙が真っ黒に固まり、雨が降るたびに、外で掬った水を入れた甕には、爆弾の煤の膜が張った。行軍して通り過ぎていく軍隊まで含めれば、2万人近い人々が、三叉路の竹垣の下の壕の家にとどまっていたことがあった。アメリカの軍事芸術は、機械のようにきまりきっていたので、駐屯地ではこれといった損失もなしに、夜の帳が下りると、何千人もの人々が三叉路に溢れ出て、時限爆弾を解体し、爆撃の穴を塞ぎ、車が通るように道を案内した。夜が明けると、車一台、一人三叉路にいることはできなかつた。

その時、ハティン省青年突撃隊第55総隊第2中隊は、三叉路から約2キロ離れたティンロク社に駐屯していた。我々3人からなる前線の特派員グループは、青年突撃隊総隊に一日中はりつき、男女の青年たちと壕の小屋を分けあって眠った。ヴォー・ティ・タンの第4分隊は、村の中心にある4つの民家に分散していたが、そこは我々が一番よく立ち寄るところであった。20歳前後の年齢で、我々はすぐ親しくなり、いろいろなことを喋りあった。分隊長のヴォー・ティ・タンとホー・ティ・クックは、2人とも小柄で小太りで、長姉然としていた。一番年下のヴォー・ティ・ハーは、歌を小さな青い手帳に書きつけるのが好きで、中隊の文芸活動の中心だった。年月は1人1人の姿の思い出をぼんやりと覆ってしまった。なぜならそのころ彼女たちは、他の人々のように普通の人々であり、我々がハティン省の省委員会に帰ってニュースを書き、フィルムを現像してハノイに送る前に分隊と別れた時も、戦場での多くの別れのように、純真で明るい若さがあつた。娘たちが、「写真を私たちに送って下さいね。写真がなければ552に来てはだめですよ」と言いながら、一字一字丁寧に住所を書いていたのを今でも覚えている。

フィルムの現像も間に合わず、記事もまだ書いていないのに、1968年4月27日の午後、その時から「ドンロクの10人の娘」という共通の名を持つようになった第4分隊の10人の娘は戦死した。ドンロクでの損害の知らせは毎日のようにあつた。ドンロクでの英雄的な模範もまた少なかつた。グエン・ティエン・トゥアンは、時限爆弾の野原を横切り、出発しようとしていたトラックの団を止めるのに間に合った。ラ・ティ・タムは爆弾の野を走り、新しい爆弾に標識を差した。ヴォン・ディン・ニョーは車で爆弾を押して、道の横に落とし、車が通るようにした。第210高射砲大隊は、多くの高射砲分隊が倒れるまで、毎時間米機と対峙していた……。しかしこの集団的な戦死は、前線全体をおののかせた。彼女たちはすべてとても若く、誰も恋人がいなかつた。その死はおそらく、彼女たち自身も気づかないうちにふりかかつた。その日の夜、道を通すようにという特別命令があつたが、道の真ん中に爆弾の穴が2つあり、午後からすぐに埋めなければ間に合わなかつた。中隊の命令を受け、娘たちは肩にシャベルをかついで、真っ昼間に三叉路に出た。昼間に三叉路に出て任務を行えば、身を守るものは丘の麓にあるいくつかの簡単な壕しかなく、生きているのは万にひとつの幸運に頼るようなものであつた。予想したとおり、何度かA3J電子偵察機が通り過ぎると、その日の午後は、地上攻撃機の群れが15回飛んできて、下方で移動している

小さな目標を狙って爆弾を浴びせた。三叉路は爆弾の煙で真暗になり、分隊は3回爆弾に埋められたが、土を振り払って立ち上がり、土を掘り、石を運んで、爆弾の穴に投げ入れる作業を続けていた。15回目の爆撃になって、作業はまだ途中だったが、ひとつの大きな爆弾が壕の入り口の前に落ち、爆弾の風圧と入り口を塞いだ土が、彼女たちを殺した。1分たち、5分だったが、監視塔からは、地面に倒れた10人のうちの誰も立ち上がるのが見えなかった。戦場全体が静まりかえり、それから同じ部隊の人々のすすり泣く声が起った。

私がそこへ行ったときは、1人1人の顔はもはや見るができなかった。雑木で作った戦時の棺が10人分、野戦小屋に並べられ、バナナの幹が切って線香立てにしてあった。天人花、ムア、マウダンなどのカンロクの痩せた丘の野の花が、彼女たちの周囲で紫色に咲いていた。声を詰まらせ、怒りを抱えて、追悼式は静寂の中で行われた。我々の頭上には敵機が飛び回り続けていた。三叉路では爆弾が破裂し続けていた。

その年月は過ぎ去ってしまい、ドンロクの娘たちの墓は3度移され、今は、松や白檀の葉の緑と、人々が記念碑のまわりに植えた花の香りに包まれたドンロク三叉路のそばに戻った。ドンロク社は今では、2500万立方メートルの湖から引いた水で、70ヘクタールの田を耕している。娘たちの故郷のドゥクトとカンロクには電気が来ている。アスファルトで舗装した数キロの道が、1号線道路から三叉路までをつなぎ、橋や水路も作り直された。周囲の住民は以前ほど貧しくはなくなったが、飢えと貧困は過去のものにはなっていない。今度の機会にハティン省とカンロク県は、英雄的な10人の娘の追悼式を盛大に開催するであろう。土地は貧しいが、人々は情義に富んでいる。

今では、当時の英雄と同じ部隊の人々は、人生の坂の向こう側に行く最初の数歩を歩んだ。我々は、年取った男女が、髪は白く胸には勲章をぎっしりつけて、風雪の中に立ち、かつて赤煉瓦のひとつひとつが戦勝した軍隊の歩みに合わせて響いた広場の真ん中で、震える手で小さな旗を掲げているのを、少なくとも小さな画面の中に見たことがないだろうか。ドンロクの英雄たち、何万何百万の英雄たちは、独立と自由のために倒れたが、自分を守ることはできなかった。しかしそれは、今日の我々と明日の世代が、独立、自由、幸福を享受するためのこの上ない犠牲である……。さらに10年、100年たって、忘恩背義の輩が、我々が200年以上前に生きていた英雄を、臆病で卑劣な人間のように描写するのと同じように、娘たちを戦争の「愚かな犠牲者」のように話さないだろうか。そんな暗い考えが、ドンロクの日々を思い出した時、私の頭をよぎった。一瞬悲観的になったことを、あのころの女性の友人たちよ、許してほしい。なぜなら、高邁な犠牲は、あなた方の、大義のためのかげがえのない選択であったのだから。なぜなら、あの苦しく豪胆な時間は、本当にあったことなのだから。あなた方はいつまでも若い人々であり続け、人々の心の中でいつまでも生き続けるであろう。

【片山須美子 訳】